

令和 8 年 度
宮崎国際大学 教育学部
指定校推薦

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、社会学者でオックスフォード大学の教授である 荻谷 剛彦^{かりや たけひこ}さんが、日本の学校が行う教育の範囲（＝教師の仕事）の広がりについて述べたものです。荻谷さんの意見を要約しなさい。また、日本で教師の仕事が増えていった理由とその対応策について、あなたはどのように考えるか、要約と合わせて600字以内で述べなさい。

学校は、子どもが大人になるまでに必要な知識を、それぞれの家庭にかかわって専門的に教える場として発展してきました。少数の大人が教師という専門家として、たくさん子どもたちを教える。と同時に、子どもたちがたくさん集まることから、人との協力のしかたやつきあい方といった、勉強以外のことを教えるのも学校の役目だということになりました。大人になる、つまり社会の一員になるためには、学校で教える知識だけではなく、社会生活に必要な習慣やルール、さらには学校の科目でいえば「道徳」に関する、人間や人生や世界についての基本的な考え方（人間観・人生観・世界観）も学校で教えたほうがよい、と考えられるようになったのです。

ところが、一方でこれらを教える場所は、学校だけにかぎりません。家庭も重要な場所です。地域の他の大人たちがかかわることもあるでしょう。さらには、教会や寺院が大きな影響力をもつ場合もあります。つまり、勉強以外の「大人になる」までに必要なことがらをどこで教えるかについては、社会全体の中で、さまざまな場所がかかわっていて、その間の役割分担もいろいろありうるということです。どんなところが、どんな責任を負うのか。その線の引き方によって、学校が行う教育の範囲（＝教師の仕事）も、変わってくるのです。

日本の学校の場合、とくにこの面で学校に期待されるところが大きいようです。日本の学校では、いろいろな活動が「よい大人になる」ための教育活動と見なされ、教育の範囲に入り込んでいくことが多いのです。

例をあげましょう。たとえば、給食。学校で給食を食べるだけなら、別に「よい大人になる」ための活動とは見なされません。ところが、どんなふうに食べるかということがかかわってくると、給食も立派な教育の一環となります。生徒たちが順番に給食係になって、みんな協力しあって昼食を食べる、食べ残しはいけないといわれる、など、たんにおなかをいっぱいにする以上に、給食には「よい大人になる」ための意味が与えられます。

学校のそうじもそうでしょう。アメリカの学校などでは生徒が自分で学校のそうじをするわけではありません。学校には、そうじをする人が雇われていて、その人の仕事になっているのです。それに対して日本では、自分たちで使う教室などを生徒自身がきれいにすることにも、「よい大人になる」ための活動としての意味が付け加えられます。

このように、学校での生活のいろいろな面が教育という仕事と関係づけられる。その結果、先生が責任を負わなければならない範囲も広がっていくのです。「これも、あれも教育のた

め」となることで、先生の仕事はどんどん増えていくのです。

これとは、ちょうど反対の例に見えるのが、アメリカの学校です。アメリカの学校では、先生は授業を教えることに専念しています。生徒の相談にのるのは、スクールカウンセラーという専門家で、どの学校にも必ずいます。生徒の問題行動は、こういう専門家がしっかり指導することになっていて、先生の仕事から外されているのです。クラブの指導も、専門のコーチや指導者がついたりします。それに、アメリカの学校では、放課後や休み中の教育は家族の責任という考え方がしっかりしていて、先生たちは校外補導などの仕事もしません。しかも、給料が支払われるのも、学校がある九月から六月まで。長い夏休みは給料も出ません。夏休みにクラブの指導をしたりすることもないのです。

それに対して、日本の先生たちは、じつにいろいろな仕事を、一年中にわたってやっています。土日だって、夏休みだって、クラブの顧問をしていたら学校に出ていきます。校外での事件や問題行動にも、学校の責任が問われることが少なくありません。いろいろな専門家が学校にいない分、先生たちが何でも引き受けているのです。

このように学校が行う教育の範囲が広がっていった理由は、どこにあるのでしょうか。先生にたくさんの仕事を期待するようになったのは、なぜでしょうか。あなたも考えてみてください。

(荻谷剛彦『学校って何だろう』による・一部省略がある)